

紹介

土橋寛著

『古代歌謡全注釈日本書紀編』

本書は昭和四十七年一月刊行の『古事記編』につぐ姉妹編で、ここに著者の古代歌謡研究は集大成された。

体裁は、『書紀』所載の百二十八首の歌謡についてその歌詞を前文・後文と共に掲げ、(1)本文掲出(歌謡原文を併記)、(2)口訳、(3)語釈、(4)構成、(5)考説の順序で、説明がなされる形である。

本書でも、前著と同様、「これまでの古代歌謡に関する『研究』と『注釈』との総合としての『解釈』を目的とした」(『古事記編』あとがき)とする立場から、書紀歌謡の全てについて独立歌謡と物語歌の相違を見きわめ、前者についてはその本来歌われた場や機能を解明し、後者については所伝(物語)の实质や伝承荷担者ないし述作者、所伝成立の時期などに触れつつ、歌の文学的解釈が施されている。

著者の古代歌謡研究は、『古代歌謡集』(昭和32年、岩波書店)、『古代歌謡論』(昭和35年、三一書房)、そして『古代歌謡

と儀礼の研究』(昭和40年、岩波書店)と、大局的にいえば独立歌謡(民謡)の実態や背景の解明に重点があったといえよう。それは、歌謡をも創作歌(抒情詩)と同列に捉える「抒情詩的歌謡観」の克服のために、歌謡の社会的機能や構造を明らかにしつつ歌謡学の方法を打ち立てるといって、いわば新聖道を拓いてきた著者の行程としては、必然の帰結でもあった。しかし歌謡の性格を見きわめる一方で、常に歌の起源や抒情詩との関連などに目が配られていることも、『古代歌謡論』以来一貫した視点である。それらがさらに『古代歌謡の世界』(昭和43年、塘書房)において、古代歌謡の世界全体が体系的に展望しうるような形で総合化されたわけであるが、特にその第五章「歌謡と物語歌」のいわば原論は、『全注釈』の物語歌の解釈において深められ具体化しているといえよう。また、書紀独特の「童謡・時人の歌」についても当該歌の注釈の項では勿論、巻末の「解説」において、同じ「歌謡の世界」の第四章「童謡と時人の歌」を深める形で力説されている。

本編を縮いて驚くのは、国語学、民俗学、歴史学等々のいわゆる隣接諸科学に渡りながら、すべての論証が注釈を軸に据えた歌謡の文学性の解説に収斂されてゆく、周到かつ柔軟な方法の展開である。歌謡本文の訓みが正されたものも幾つかあり、

黒沢幸三著

『日本古代の伝承文学の研究』

本書は本学大学院昭和四十年年度修了生黒沢幸三氏の十年余の主要業績を収録した処女論文集であり、東北大学学位請求論文でもある。

第一章は「伝承文学研究の立場と方法」の題の如く、古代伝承文学を「集団発想による文学の制作、口承を媒介とした文学の形成という点に留意」して研究したとの基本的立場とともに、各章毎の研究目的、立場、方法が詳述されている。

第二章「氏族伝承」には、(一)息長氏の性格、関係諸系譜・伝承の形成と、『古事記』所収の経緯を解明して、その研究の重要性を指摘し、息長氏研究の先鞭を付けた「息長氏の系譜と伝承」、(二)六論文によって、ワニ氏の姓の由来と性格、その伝承は継体朝に筒城宮のハエヒメの後宮でワニ氏の語部によって形成・改変された経緯を多方面から考察した「ワニ氏の伝承」、(三)三輪氏関連の歌謡・神話・歌物語は、大物主神を祭祀する三輪氏配下の巫女達が信仰の中で形成したことを説いた「三輪氏の古伝承」、(四)雷神信仰に関係する古代の小子部栖軽の伝承、道場法師譚、中世の一寸法師譚を氏族伝承の説話への変遷と展

紹介

語釈や解釈の精緻さ新しさなど、本書の成果については逐一例をあげるまでもない。そして興味深いのは、むしろ諸科学の援用に留まらず、他の分野への提言が数多く見られる点である。

例えば具体的な語の解釈については、現段階における上代語研究の一往の水準と考えられる『時代別国語大辞典、上代篇』を越える成果が少なくない。また『古事記編』解説以来主張されている孤語の解釈法などは国語学への、更に来自直・来自部と大伴氏の歴史的関係(P45)、「武内宿禰像の成立」(P114)、「太子」の語義(P155)、常世神事件の意味(P346)等々は歴史学の側への、それぞれ提言としても重要である。更にまた、本書の特徴の一つである、『記』との重出歌を手掛かりとした『記』と『書紀』の歌謡や歌物語の質の違いの解明は、神話ないし氏族伝承の研究に資するところが大である。

付篇として、「書紀歌謡語彙索引」と「主語語釈・事項索引」とがあり、いずれも『古事記編』と併用すれば、前者は「記唱歌謡総索引」として至便であり、後者は一面で、上述のような本書の内容に支えられて、「古代学」に関する辞(事)典的役割をなすといっても過言ではあるまい。

(角川書店刊、昭和五一年八月 日発行/A5判、四三九

頁/三九〇〇円)

(駒木敏)

開と云う問題意識で論じた「小子部氏の伝承と一寸法師譚」の四グループの論文が収録されている。

第三章、「仏教説話」の副題には「『靈異記』について」とある如く、『靈異記』に関する五論文が収録されている。それらは(一)『靈異記』所収説話の文学史的特色を、それらが氏族社会崩壊期の地方豪族の利害中心の生き方と密接に関連した世間話であるところに認めた「靈異記の文学史的位置」、(二)景戒の出身地、氏姓、人間性を紀州名草郡との関連で論じた「靈異記の編者景戒」、(三)『靈異記』の中でも特に類話性の濃い四グループの説話に就き、類似度、発生、景戒の蒐集と撰録を論じた「靈異記の類話」、(四)道場法師系説話群の形成事情と景戒の係りを論じた「靈異記の道場法師系説話」、(五)殺牛のモチーフを持つ説話の形成を中国説話の翻案、渡来系信仰、習俗との関連で考察し、道場法師系説話群との関係、景戒の作家的性格にも言及した「靈異記殺牛祭神系説話」である。

第四章「寺社と説話」は中世説話に古代的性格を認めその展開を論じた四論文が収録されている。その(一)はカムハタ寺縁起は『靈異記』中巻所収の蟹報恩譚が綺原坐建伊那大比売神社の巫女達により、その神婚譚と結合され形成されたことを『法華験記』等の検討と併せて考察した「蟹満寺縁起の源流とその成

立」、(二)は道成寺縁起が、熊野山伏と宿の寡婦の情愛の世間話、道成寺の沈鐘伝説、熊野の法華経信仰の結合で成立したこと、その形成と伝播は熊野山伏が担ったこと、その諸説話集、縁起、謡曲、浄瑠璃、田植草子への受容と展開、及び文学性を論じた「道成寺説話の特性」、(三)は古浄瑠璃「しのだづま」の源流を陰陽師阿倍氏が信太の暦法師である聖神社の神使狐との異類婚によって説いた神子誕生譚と見、これが暦の印刷販売に平行して放浪芸たる説経に受容され、浄瑠璃に展開したことを論じた「信太妻の源流と成立」、(四)は中将姫を主人公とする「当麻曼茶羅縁起」成立の契機、恵観請来の浄土曼茶羅が鎌倉時代に至って、法然門下の証空一派に発見されたことにあること、それが当麻寺の古代からの歴史的、風土的背景とも深く係ること、謡曲・お伽草子への展開及び文学性を論じた「当麻寺と中将姫」である。

第五章は総まとめで、既述の研究対象に三輪山神話を典型とする水神と巫女の伝承が重要な位置を占めていたことの意味を究明する。

本書の概要は以上であるが、そこに共通する研究方法は、個々の伝承に就いて、形成者、伝播者、受容者及びその場を具体的に究明することによって、その形成と伝播、文学性を考察す

るところにあり、しかも文献操作に終始することなく、歴史学、民俗学の研究成果と方法を援用し、風土性を重視して多角的な視野から研究が進められている点が注目される。かつまた、古代だけにとらわれない、積極的な中世への言及に典型的に見られる意欲的な取組みの姿勢が諸者への大きな刺激となろう。

(寺川真知夫)

南波浩著

『紫式部集の研究 校異篇 伝本研究篇』

『紫式部集 付 大式三位集 藤原性規集』

両著書の功績は、我々が身近により正しい本文で紫式部集を讀み、かつ論じることが可能にした、という点をまずあげねばならない。そのことは両書の概要を述べることによって充分理解されるだろう。

前書は「校異篇」「校本篇」「伝本研究篇」より成る。校異篇では底本の実践女子大本の本文を本行にし、他諸本の異文をその左横に順次並記するという組み方がとり入れられ、又、「補遺(一)(二)」(本来は家集中にはなかったと思われる歌群)等をはじめ、「諸本歌序対照表」「五句索引」といったものも付

載されており、極めて使い易いものとなっているのである。次の校本篇は定家本系を軸として、厳しい検証の末に校定本文(一二八首)を作成したものであり、これが岩波文庫本の前姿となっていることは周知の通りである。

伝本研究篇では、第一章で紫式部集の研究史の概要、第二章で自撰集説及びその編纂意図、第三章で諸伝本の系統と各伝本の詳細な解題がそれぞれ述べられている。この伝本系統論では、従来の池田亀鑑説に対して、第一類定家自筆本系(五種)、第二類古本系(三種)、第三類別本系(二種)の三系統が立てられたのである。これは式部集研究史の一つのエポックになりえており、三八本にのぼる膨大な諸伝本群はこうして本書によって整理され、理論化体系化へ大きく歩を進めたのである。

従って岩波文庫本の『紫式部集』は、こうした研究を背景にもちながら我々の前に開かれてあるのだと言える。ここでもまた校定本文の他に、古本系本文、式部の娘の大式三位集、兄の藤原性規集、等々の付載があり致れり尽せりといった呈を相している。内容的にも、豊かな実証に裏付けられた脚注と解説は、各々の歌の解釈を完全に果しながら、しかもそれを超えて、式部集全体を把握しようとする氏の体系的視座が躍如としていることがうかがわれるのである。

精緻で厳格な研究と様々の細かな配慮に触れ、続刊予定の「研究篇」「評釈篇」に強く期待するとともに、実はとりもなおさず我々自身が目の前におかれた紫式部集及び紫式部をどう把握するのか、という問いをつきつけられていることを知るべきであろう。

(笠間書院刊、昭和四七年九月三十日発行/A5判、四四

〇頁/六五〇〇円)

(岩波書店刊、昭和四八年十月十六日発行/岩波文庫、二

三三頁/一四〇円)

(小島繁一)

玉井敬之著

『夏目漱石論』

本書は、著者が昭和三四年から昭和五〇年にかけて発表した漱石関係の論考をまとめたものである。全体は三部からなり、第I部では『吾輩は猫である』から『こころ』にいたる主要作品の作品論、第II部は明治から大正へという視角に立った「夏目漱石論―明治型知識人の問題―」を中心にした作家論、第III部は漱石研究史の概観といった構成になっている。

漱石を問うことは、同時に自己の「人間学」を展開することにほかならないと「あとがき」でいう著者は、それゆえ作品と

作家を統一的にとらえようとする姿勢をみせているようである。第I部では、『道草』以前の漱石の作品史を「虚構がだけに理念に近づき、現実と隔絶されていく過程」としてとらえ、それを個々の作品でできるだけ具体的実証的に論じようとしている。たとえば、『彼岸過迄』以降の作品が「短篇の連鎖」としての長篇小説」という方法をとること、「外よりも内の世界」が重視されてくることとが重ねて考えられているところにみられるように、文学の方法と内質とが統一的な視座で論じられている。また、第II部では「瓜実顔の女」や漱石の法蔵院時代など、伝記的側面にも言及しているが、そこでも、「瓜実顔の女」を写真から出発せず、作品を通じて論証するという形をとっており、その人物が誰かというモデル問題にかかわろうとしない。そして第III部の研究史概観は、昭和四〇年までの主要な夏目漱石論の研究史的位置づけを試みている。

なお、巻末に付された「夏目漱石主要研究文献目録」も昭和四〇年以降の著者にとって主要と思われる文献があげられ、とりわけ雑誌論文の分類では、内容別に項目を立てていて便利である。

(桜楓社刊、昭和五一年一〇月五日発行/A5判、二五五頁/一八〇〇円) (田中 励 鑑)